

七人の花嫁

野村胡堂

—

「やい、八」

「何です、親分」

「ちよいと顔を貸しな」

「へ、へ、へッ、こんな面つらでもよかったら、存分に使って下せえ」

「氣取るなよ、どうせ身代りの贖首にせくびってえ面じゃねえ、顔と言ったのは言葉の綾あやだ。本当の所は、手前てまえの足が借りてえ」

捕物の名人と謳うたわれるくせに、滅多めったに人を縛ったことのない御用聞の銭形の平次は、日向ひなたでとぐろを巻いている子分のガラツ八にこんな調子で話しかけま

した。

松は過ぎましたが、妙に生暖かいせいか、まだ江戸の街にも屠蘇とその酔よが残っているような昼下がり、中年者の客を送り出すと、平次はすぐ縁側へ廻って、ガラッ八を居睡いねむりから呼び起したのです。

「へエ——、どこへ飛んで行きやアいいんで——」

「今話を聞いたらろう、あの客が長々と話しこんだ——」

「いいえ」

「聞かねえ？」

「人の話なんか聞きやしませんよ、そんなさもない八さんじゃねえ」

「いい心掛けど、——と言いてえが、実は居睡いねむりをしていたんだらう」

「まアそんなところで、——何しろ日向は暖あつたけえし、懐は涼しいし、じっとして
いりや、睡くなるばかりで——」

「呆れたものだ。まあいいやな、俺が詳しく復習ってやろう」

「お手数でもそう願いましうか」

「黙って聞けよ」

「へエ——」

平次の態度には例にも似気なく真剣なところがあるので、無駄の多いガラツ八も、さすがに口を緘んで、親分の顔を見上げました。

「今此処へ見えたのは、十軒店の八百徳の主人だ。一人娘のお仙を、同じ商売仲間の末広町の八百峰の跡取息子に嫁にやるについて、俺の力が借りたと言うのだよ」

「悪い虫でも附いているんでしよう、どうせ当節の娘だ」

「そんな話じゃねえ。聞けば近頃、神田から日本橋へかけて、花嫁がチヨイチヨイ消えてなくなるそうだな」

「それなら聞きましたよ。祝言の晩に行方知れずになった花嫁は、暮からこつち、二人くらいあるでしょう。どうせ言い交かわした男でもあつて、いよいよとう晩に花嫁姿はなよめすがたで道行を極めたんじやありませんか。土壇場どたんばに据すえると女の子は思おもいの外強くなりますからね」

「ところが、八百徳の主人の話では、消えた花嫁が三人もあるそうだよ」

「妙せうに気が揃そろつたものですねえ」

「そんな暢のんき気な事を言つちやいられない。一と月や半月のうちに、花嫁が三人も行方知れずになるといふのは、少し可怪おかしくはないかな、八」

「そう言えばそうかもしれませぬね」

「どこの家でも、娘に男があつて逃げたと思おもい込んでゐるから、世間体はばかを憚おそつて表沙汰にはしないそうだが、八百徳の主人は、どうも自分の娘も消えてなくなりそうなりで心配しんぱいでたまらないと言いうんだよ」

「成程ね」

「そこで手前てめえへ頼みというのは——」

「そのお仙とかいう娘に、虫が附かいてるかどうか嗅かぎ出して来いというんでしょう」

「そんな氣障きざんな用事じゃない。娘の身持は八百徳の主人が引受けるって言うから、差し当りそれを信用するとして、手前はソツと嫁入の行列に躡ついて行って、一と晩見張みはりつていさえすりゃいいんだ」

「成程、こいつは、嫌な役目だ」

「何だと、八」

「知恵も銭も要らねえ代り大した辛抱しんぼう役だ。花嫁に躡ついて行って、三々九度とこさかずきから、床盃とこさかずきまで見せられた日にゃ、全く楽じゃないぜ」

「贅沢を言うな」

「これでも独り者ですぜ、親分」

「独り者だから、そんな場所によく眼が届くんだ、役不足なんか言っちゃならねえ」

「へッ、助からねえな」

ガラッ八は文句を言いながらも、頭の中では、その晩の冒険に対する、いろいろの計画をめぐらしておりました。

二

日本橋の十軒店けんだなから神田の末広町まで、自動車を飛ばせば五分くらいで行ってしまいますが、昔の花嫁の行列はそんな手軽なわけにはゆきません。

町内の駕籠清かごせいから別仕立の駕籠が五挺、花嫁と、仲人夫婦なこうどと嫁の附添と、親

類の重立った者が乗って、あとは定紋じようもんの附いた提灯ちようちんを挟はさんで、思い思いに歩くところですが、時節柄物騒ねというので、駕籠だけを飛ばせ、仕出しはゆるゆる後から練ねって行こうという寸法、韋駄天いだてんのような粒選りの若い者に担かつがせた五挺の駕籠は、江戸の街の宵霜よいしもを踏んで、丁度明神下から鼠屋横町ねずみやへ抜けようとした時でした。

闇の中から不意に飛んで来たのは、一本の棒、これが花嫁の乗った真ん中の駕籠の、先棒またの股の間へサツと入りました。

「あッ、何をしやがる」

と言った時は、もう見事に突んのめって、弾はずみの付いた駕籠は、往来の真ん中へドタリと落されました。

「それ出た」

それくらいのことには心得た後棒の若い者、息杖いきづえを取って花嫁の駕籠の前に立

ち塞ふさがりましたが、相手はその出鼻くじを挫くじくように、横合から飛出して、胸のあたりをドンと突きました。

何分宵闇の中に起つた不意の出来事で、それに、曲者は恐ろしい手練しゅれん、後棒の若い衆は思わず跳ね飛ばされて尻餅しりもちをつくど、その間に飛付いた、第二、第三の男、物をも言わずに花嫁の駕籠を引さらつ漑ひきつて、引摺ひきずるように、横手の狭い路地の口へ――。

「野郎、待ちやがれ」

先棒は漸ようやく起き上がりましたが、向脛むこうすねを強したかにやられて、急には動うごけません。前後の四挺の駕籠は、この時漸おろく下されて、八人の若い者が、

「何をしやがる」

息杖を振りかぶつて、八方から花嫁の駕籠を追いかけました。幸い路地は三尺の抜裏で、駕籠は容易に通りません。花嫁の駕籠は少し斜ななめに、その口を塞ふさい

だまま放り出されたところへ、十人の威勢のいいのが、十ぼんの息杖を振りかぶって、すかさず追いつがったのでした。

別に町駕籠を仕立てて、花嫁の行列の直ぐ後に続いたガラツ八は、この騒ぎを見ると転がるように降り立ちました。

「到頭出やがったか、逃すな」

それでも商売柄、一番先に路地の口に飛付きました。が、花嫁の駕籠が入口を塞いで急には曲者の後を追うことも出来ません。

「えッ、面倒臭え」

駕籠を飛越して路地の闇に入ると、鼻の先に通せん坊をしたのは恐ろしく巖乗な木戸。

「やい、ここを開けろ」

押しても叩いてもビクともすることではありません。

そのうちに、四挺の駕籠から飛降りた仲人夫婦やら附添の者、これは一番先に花嫁の安否あんびということが頭へ響きます。

飛付くように駕籠の垂たれを押上げて、

「お仙さん、驚いたろう」

と見ると、中は空っぽ。

「あッ」

咄嗟とっさの間に、駕籠の中から花嫁は攫さらわれてしまったのでした。

三

八百峰の近くまでたどり着いて、いくらか心持に隙すきの出来たところを狙ねらったやり口や、抜裏を利用して、駕籠で入口を塞ふさいだ細工さいくなどを見ると、容易な曲

者ではありません。

「親分、何んとも申訳がねえ、俺は腹でも切りてえ」

すっかり恐入って報告をする八を宥^{なだ}めるように、

「いや、その様子では俺が行っても失敗^{しくじ}ったかもしれねえ。手離せねえ用事があつたにしても、手前^{てまえ}一人やったのが間違^{まちが}げえだ」

平次はそんな事を言っております。

時を移さず、鼠屋^{ねずみや}横町の抜裏から、八百峰の立ち騒ぐ人達の様子、驚き呆^{あき}れる十軒店の八百徳まで廻^{めぐ}って見ましたが、手掛りらしいものは一つもありません。

「六尺棒を若い衆の股^{また}の間に投げ込んだ手際^{てぎわ}じゃ、ザラの泥棒や人さらいじゃねえ——」

という噂を聞いたのが精々、平次は何の得るところもなく、暁方近くなつて

引揚げて来ました。

その頃は、諸大名の門番や、見付の番人は言うに及ばず、渡り中間、軽輩けいはいな士分の者まで、一種の武器として、棒を使ったもので、駕籠屋の股へ棒を放り込むくらいの事は、ちよつと心得のある者なら、誰だつて出来ます。

花嫁は評判の堅い娘で、八百降の総領とは許嫁しいなずけ同士、色恋の道行でないことは、口善悪くちさがない近所のお神さん達までが牡丹餅判ぼたもちばんを捺おします。

それに、盗まれた花嫁は、暮から勘定して四人目、手口はそれぞれ違います、兎に角、余程深い企たくらみのあることは、鼻の良い平次には、判り過ぎるほど判ります。

それから三日目。

「親分、聞きなすつたか」

朝のうちから、ガラツ八が怒鳴どなり込んで来ました。

「何だ、八。相変らず騒々しい」

「石原のも失敗しくじったんですとさ」

「何？」

「昨夜柳原河岸で、石原の利助親分があの大い眼を光らせている中から、五人目の花嫁が攫さらわれたって言いますぜ。材木河岸みくらやの美倉屋の娘で、今度はたいした容貌きりようだ」

「フーム」

「これで五分と五分だ。石原のでさえ馬鹿にされたんだ、八五郎ばかりが失敗しくじったんじゃねえ——、態さまア見やがれた」

「馬鹿野郎ッ」

「へッ」

「石原の兄哥が失敗ったからって、手前のドジの言訳になるか」

「へエ——」

「俺はそんな心掛の人間は大嫌いなんだ。こっちはこっち、石原の兄哥は石原の兄哥だ。人の失敗を喜ぶような野郎は、俺のところにて貰いたくねえ」

「へエ——」

「手前は人間はガラガラして、まことに出来のよくねえ野郎だが、悪気わるげのないところだけが取柄とりえだったんだ」

「へエ——」

平次の怒りは、何時になく峻烈しゅんれつを極めました。さすがのガラツ八も、あまりの風向に、暫くは口も利けません。

「さア、出て行きゃアがれ。俺はそんな根性の曲った野郎を見ていたかアねえ」
「親分、成程、そう言われてみると、あっしが悪かった。勘弁しておくんなさいまし」

「ならねえ」

「そう言わずに、親分」

「詫わびを入れたきやア、石原の兄哥へ行ってそう言ってみろ」

「――」

「間ま誤ご間ま誤ごしやがると、向む脛こうをカッ払うぞ。石原の兄哥の手柄を喜ぶような心持になつたら、改めて逢つてやる」

あまりの剣幕に驚いたか、ガラッ八は二つ三つお辞儀をすると、怯おえた猫の仔のように、後ごずさりに格子の外へ飛出してしまいました。

日頃温和な平次が、こんなに怒るのは、何か仔し細さいのあることでしょう。人のいいガラッ八は、押して聞き返す勇氣もなく、妙あに諦きらめ兼ねた涙ぐましさで、何い処ずともなく立去つてしまいました。

間もなく、第六人目の花嫁が盗まれました。新革屋町（今の松下町）の染物屋の娘お辰、同じ神田鍋町の酒屋伊勢直へ嫁入りさせましたが、どこでどう摺り替えられたか、向うへ行つて、綿帽子を取つて見ると、花嫁が變つていたというのです。

家を出て駕籠に乗せるまで、仲人は花嫁から手を離さず、伊勢直への道中は、時節柄出入りの頭や職人に頼んで嚴重に守らせ、駕籠を下りると、仲人の外に、多勢が人垣を作つて送り込んだのですから、途中で摺り替えられる筈は万に一つもあるとは思われません。

その上、何ということでしょう。この晩は双方から頼み込まれて、特に銭形の平次が乗り出し、宵から嫁の姿を見張つて一刻も綿帽子から眼を離さなかつ

たのです。

嫁のお辰は、里方の染物屋にいるうちに替えられたに相違ありませんが、それが、どこで、どうして入れかわったか、さすがの平次にも、全く見当が付きません。

お辰の代りに、花嫁に仕立てられたのは、どこから来たともなく、二三年この方、^{かた}神田あたりを彷徨^{さまよ}い歩く女乞食のお六、これは金看板の白痴^{ばか}で、何を訊いても一向取り止めのない始末です。

「お前はどこから——誰が連れて来たんだ。言わないか」

「言わないよ」

「言わなきゃア打つよ、呆^{あき}れた馬鹿だ」

寄ってたかつて責めると、

「黙っていさえすれば、伊勢直の若旦那のお嫁さんにするって言われたんだ。」

言うもんか」

この調子では全く手が付けられません。

もって

尤も、評判娘のお辰とは似もつかぬ醜い容貌で、年も三十幾つかは越したでしよう。綿帽子さえなかつたら、お辰と間違えられるお六ではありませんが、女乞食にしては様子が如何にも華奢きゃしゃなのと、一言も口を利かなかつたので、伊勢直へ連れ込むまで、誰も気が付かずにいたのでしよう。

それよりも重大な原因は、近頃の物騒な噂おびに怯えて、人間という人間が、あまりに緊張しきっていたために、思わぬ心理的欠陥けっかんに乗ぜられたのでしよう。

何しろ伊勢直は煮えくり返るような騒ぎ、折角宵から大目玉を剥むいている平次も、今度という今度は、すっかり面目玉を踏みつぶしてしまいました。

なおもお六を捉つかまえて、嚇おどかしたり、すかしたり、一と晩がかりで責め抜いてみると、

「誰やら知らない人が来て、伊勢直の若旦那と添そわせてやるからと言って、知らない家へ引ひき摺り込んで、湯へ入れて、化粧をさせて、紋付を着せて、伊勢直の裏口からそつと引き入れた——」

というだけは解りましたが、お六の足りない脳のうみそ味噌は、問い詰められると混乱するばかりで、『誰やら』という人相も『引入れられた』という家も、まるで見当が付きません。

解ったことと言うと、お六の着ていた紋付や帯は、お辰の着ていた品と、色も柄もそっくりその儘というほどよく似ておりますが、実は、今までに誘かどわか拐された五人の花嫁の身に着けた品のうちから、お辰の嫁入支度と似に寄の品を集めたもので、少し気を付けさえすれば、誰にでもその違いは判る程度のものでしたことです。

「銭形の親分、御覧の通りの始末だ。誰の所せ為いというわけではないが、どうか

嫁を探してやって下さい。六人の花嫁を一緒にさがして下さい、それに越した事はありません。万一の事があつたら——」

伊勢直の主人はゴクリと固唾かたずを呑みました。

「面目次第も御座いませぬ、平次の男に賭かけて、キツと探し出してお目にかけます。三日といいたいが、せめて後五日、この月中には何とかいたしましょう」

言葉は柔やわらかいが、平次の胸の中には、勃然ぼつぜんとして、命がけの決心が定つたようです。後指をさされるような心持で、その儘外へ——。騒ぎを聞いた近所の人が往来へ垣を築いて、闇の中には物々しい囁きが微風のように動きます。

五

「おつ母ア、家にいなさるかい」

「あら親分」

お静は平次を迎えてイソイソと立ち上がりました。平次の許嫁いいなすけになつてからは、両国の水茶屋へ出るのは止してしまつて、八丁堀の与力、笹野新三郎のところへ、手不足の時だけ手伝うのが精々、大抵たいていは家において、母親を相手に、嫁入の心支度ともなく、針を持つ日の多いこの頃だったのです。

この時、お静は、平次と九つ違ひの十八、厄前やくまえに祝言の盃だけでも済ませるつもりで、仲人なこうどまで立てておりましたが、お上の御用の多い平次は、せめて春永にでもなつたら——と、一日延ばしに延ばしていたのです。

美しさも賢かしこさも申分なく恵まれたお静は、平次の顔を見ると、ポツと顔を紅らめて立ち上がりましたが、それを抑おさえるように、

「まア、親分。よくいらつしやいました」

次の間から母親が出て参ります。

「すっかり御無沙汰をしちゃった。お変わりもないようで、こんな結構なことはねえ。ところで今日は少しお願いがあつて来ましたが――、丁度いい塩梅だ、静い坊も一緒に聞いておくれ」

「まあまあ、御用の多い身体を気の毒な、そう言つて使いでも下されば、こつちから伺つたのに」

「飛んでもねえ、年寄を歩かせるようない話じゃないんで――、実は」
平次は言いにくそうに頬を撫でました。

「これは仲人から言つて貰うのが順当だが、それでは俺の心持が済まねえ」

母娘は黙つて顔を見合せました。重大な意味のあるらしい、平次の真意を測り兼ねたのです。

「ざつくばらんに言つてしまえば、一日延ばしにしていた私とお静の祝言を、わけがあつて、この月のうちに運びたいと思うんだが、どんなもんだらう」

「えッ、早いに越したことはありませんよ。私もお静も、親分がその氣になつて下さると、どんなに嬉しいかしれないが——」

母親は真つ紅になつて差しさ俯うつむ向くお静を振返つて、こう続けました。

「この月といつても、あと三日しかないから、支度がとても間に合わないよ、親分」

「おつ母ア、それも承知だ。が、あと三日のうちに祝言の真似事まねごとだけでもしないと、俺の男が立たないことがあるんだ」

「親分の男が？」

「そう言つただけでは解るまいが、——知つての通り、近頃彼方あつちこつち此方こつちの花嫁が盗まれる。それも、神田一円と日本橋の数力町かけての祝言ばかりを狙ねらつて、

暮くれから六人も行方ゆくえ知れずだ。神隠しに逢うのか誘拐かどわかされるのか、兎も角容易な
ことじゃねえ」

「そうだってね、親分」

「笹野様もことの外御心配で、平次何とかしろと仰しやるが、こればかりは雲
を掴つかむようで、どうにも手に了おえねえ。神隠しなどという言訳は、お上筋は通
らないから、十手捕縄を預かる者から言えば、これはどこまでも悪者の仕業に
相違ねえ」

「ガラッ八も石原の兄哥も失敗しくじったのを承知で、伊勢直の祝言へ行つて見張つ
たはいいが、この平次までが見事に裏を搔かかれ、尻尾しっぽを巻まいて引下がってしまった
たようなわけだ」

「世上の人が後指をさしているようで、どうにも外へ出る勢もねえ。お願いと
いうのはここだよ、おっ母ア」

「この節はすっかり怯おびえてしまつて、この界限かいわいには猫の子の祝言もねえ。
愚ぐ凶ぐ愚ぐ凶ぐしているうちに、相手が見切りを付けて、六人の花嫁を纏まとめて殺あやめる
とか——そんな事はない迄も——、遠国にでも持出されたら手の付けようがね
え。ここでもう一度相手から仕掛けさせて、動きの取れぬ証拠しやうこを握るためには、
たった一つでもいいから祝言が欲しいんだよ」

「俺の眼の前で花嫁を掬すり代かえた相手だ。平次が嫁を貰うといつたら、万に一
つも黙って見ている筈はねえ。お静坊しやうぼうに、幾度も危ない思しいをさせちや気の毒
だが、一番花嫁になつて誘拐かどわかされて、曲者の巢を探つて貰うわけには行かない

だろうか」

折入つての頼み、男の額には冷汗さえ浮べておりますが、あまりの事に、母親は返事の仕様もありません。暫く胡麻塩ごましおになつた首を襟えりに埋めて、何を考えるともなくぼんやりしてしまいました。

「親分、そんな事でお役に立つなら、どうぞ私を使つて下さい」

祝言をしてとは言いませんが、お静は顔を上げて、平次よりは寧ろむし、母親の心持を測り兼ねた様子でこう言いました。

「お静、何を言うのだえ、お前」

「いえ、お母さんの御心配は御尤ごもつともですが、私は親分のお力を信じきつております。高田お薬園の手入の時だつて、お茶の水の空屋つるに吊された時だつて、親分は見事に救つて下さつたじゃありませんか。ね、お母さん、どうぞ私を、今晚にも親分のところへやつて下さい」

母親の膝に手を置いたお静、それを揺ぶりゆすかげんに、少し甘える調子でせがんでおります。平次はこの健気な心意気に打たれて、両手を合せて拝みたいような心持で、黙って差控えました。

六

その翌々日、平次はお静と祝言の盃をあげることになりました。仲人なこうどは笹野新三郎の用人、小田島伝蔵老人、いずれ春には輿入こし入れする筈で、ポツポツ支度を心掛けていた矢先ですから、貧しい調度ながら、一と通りのものは揃っております。

お静の家から平次の家までは、ほんの二三町、駕籠にも車にも及びません。平次とお静が強たって断るのも聞かず、小田島伝蔵老人夫婦の外に、平次の朋輩ほうばい

やら子分やら二三人、花嫁姿のお静を遠巻にして、平次の家に送り届けたのは、その晩のまだ宵の内でした。

ガラッ八がいたら、さぞ頓興とんきような声で、一座を賑わしてくれるだろう——と思ふと、見えざる相手の仕掛を待って期待と闘争心に燃える平次の胸にも、何かしら一脈の淋しさが冷たい風のように吹き入ります。

新妻を攫さらわせるつもりの平次、祝言の席から誘拐かどわかされるつもりのお静、二人の氣持を薄々読んだ客——この祝言は、まことに不思議なものでした。

どうせ裏店住まいうらたなの平次、知恵や俠氣きやうきはあつても、金っ気などはろくにありません。それでも花嫁を迎える用意だけは一と通り調べて、借り物ながら屏風びやうぶを廻し、島台しまたいを飾り、足の高い膳や、絹物らしい座蒲団、時節柄寄せ集め物の火鉢まで、どうやらこうやら揃いました。

二た間打っこ抜いた室が式場で、その裏が花嫁の支度部屋、長屋の者が集まっ

て、目出度く三三九度が済むと、『高砂や——豆腐イ』と言った調子のが始まります。

紋付姿の平次も立派でしたが、それにも増して、お静の花嫁姿は鮮やかあざでした。このまま、お開きとなれば、何も彼も無事に納まります。六人の花嫁を盗んだ曲者も、さすがに銭形の平次の嫁には手を付けられなかったのでしょうか。



やがて花嫁は次の間へ下がりました。怪し気ながら、紋付を脱いで、色直しということになります。盃は幾巡りかして、さんざめく一座、誘拐も何も忘れてしまつて、大分いい心持になつて来ましたが、どうしたことか、暫く経つても、お静の姿が見えません。

「ちよいと」

髪結のお鶴さんが、屏風から顔を出して小田島老人を呼びました。

「嫁さんはどうしたんだい」

「先程から、お見えになりません」

「何？」

一座は騒然として立ち上がりました。頭から被った風呂敷でもかなぐり捨てたように、乱酔が一遍にさめてしまつたのです。

「色直しの着付けを済まして、御不浄へいらっしゃつたようですが、それつき

り見えません」

界限でよく知られた、名人の髪結かみゆい、額から右の眼へかけて赤い痣あざのあるお鶴が、その醜みにくい顔を歪ゆがめておろおろしております。

「到頭とうとうやりやがったな」

婿姿むこすがたの平次、忙しく羽織をかなぐり捨てると、足袋たびはだし跣の儘パツと裏庭へ飛出しました。誰が開けたか、路地へ抜ける木戸はバタバタになって、そこには夜目にもほの白く、贗物まがいものながら、玳瑁たいまいの簪かんざしが一本落ちております。

七

平次の活動は、本当に火の出るようでした。六人の花嫁を救い出すために、あらゆる物を賭かけてしまった平次は、この上失敗を重ねるようなことがあれば、

死んでも申訳が立たないことになるのです。

世上の噂、笹野新三郎の督励とくれい、それは暫く我慢するとしてもお静の母親の嘆なげきは、一刻も見てはいられません。それに、あの自分のために進んで、死地に飛込んだお静の、清浄無垢せいじょうむくな美しい身体を考えると、賽ころさいの目一つに、あらゆる身上を張り込んだ人間のように、平次は腹の底から胴顫どうふるいを感じるのでした。

平次は今までも決して遊んでいたわけではありませんが、もう一度必死のスタートを切って、嫁入と関係のある、あらゆる商売を調べて見ました。第一番に、神田日本橋の呉服屋、越後屋、白木屋をはじめ、筋の立ったところを全部当って見ましたが、江戸中に毎日、幾つあるか判らない祝言のうちから、神田日本橋のを選び出して聞くなどは、呉服屋へ行ったところで、何の足しにもならないことが判ただけでした。

次は鯉節屋かつおぶしや、小間物屋、筆筒屋たんす、諸道具屋、肴屋さかなや、酒屋、いやしくも嫁入の御用を勤めそうな店は、自分か子分かが一と通り廻って見ましたが、どこにも怪しい節などはなく、又婚礼の日取などを聞き廻った人間の噂は一つもありません。

併ししか、七人の花嫁誘拐かどわかしの手口は、悉く周到な用意と、長い間の計画でやったことで、偶然ぐうぜんの廻り合せて、行当りばったりな仕事でないことはよくわかっております。

念のため、一度は諦めた女乞食のお六を、その巢あきらにしている明神様の裏手の、建て捨てた物置小屋へ見に行きましたが何としたことでしょう、これは、見るも無慙むざんに縊り殺くびされて、ボロと藁屑わらくずの上に、醜みにくい死骸を横たえております。

「しまったッ、こんな事なら、もう少し口を利かせるんだった」と言つたところで追付きません。

今度ばかりは銭形の平次ほどの者も、全く持て余してしまいました。

下町中の質屋という質屋、古物屋という古物屋は、子分の者を飛ばして詮索せんさくしました。暮このかたから此方、嫁入道具などを持ち込んだ者は一人もありません。

こんな空むなしい努力を続けているうち、たった一つ気の付いたことは、石原の利助と、ガラッ八が、平次とほぼ同じ調べ口で、彼方あっちこっち此方を探し廻っていると、いうことだけでした。

八

平次は、お静にいろいろのことを言い含ふくめて置いた筈ですが、不思議なことかどわかに、誘拐かどわかされたお静からは、何の合図あひだてもありません。

お静の襟えりや帯揚おびあげの中には、格子や雨戸すきの隙すきからでも投ほうれるように、平次宛あてに

書いた手紙が、幾本も用意してあつた筈ですが、どんな場所に閉じ籠められたか、そんなものは、一つも平次の手許に届かなかつたのです。

そればかりでなく、お静の帯の間や、懐ろの中には小さい竹笛たけぶえが幾つか潜めひそてある筈です。その笛を引つきりなしに吹いてくれさえすれば、平次の子分達が聞込まない迄も、近所の人が変に思つて、井戸端の噂ぐらいに上らない筈はありません。

平次は夜となく昼となく、神田から日本橋を、へとへとになるまで彷徨い歩さまよきました。途に落ちた鼻紙にも驚き、按摩あんまの笛の音にも胆きもを冷して、本当に気の触れた犬のように馳け廻つたのです。

しかし何もかも無駄でした。もしかしたら、六人の花嫁と一緒に、美しいお静の死体は、今日にも大川に浮くかも知れない——といった恐ろしい幻想に、平次は休むことも眠ることも出来ない有様になっておりました。

犇々ひしひしと身に迫せまるのは、食い入るような恐ろしい後悔つかです、疲れ果はてた足を引摺ひるように、聖堂裏しょうへいばしから昌平橋しやうへいばしを渡わたって柳原りゅうげんの方かたへ出いようとすする平次へいぢの、塩垂しおたれ果はてた肩かたへ、後ろうしろからソツと手を置おいたものがあります。

「親分、御心配ごしんぱいですね」

振返まげってみると、髪結かみむすのお鶴つる、醜みにくい顔かほですが、それでも人のいい笑わらいを浮うべなぐさて、慰なぐさめ顔かほに、平次へいぢの顔かほを差さしのぞきます。

「あ、お鶴つるさんか」

平次へいぢは夢見ゆめみるように立止たまりました。

「お静しずさんの行方ゆくえは、少しも判わりませんか」

毛筋けすじを鬢びんに差さして、襟えりの掛かった小袖こそで、結び下くげた黒くろ襦じ子ゆすの帯おビは、少し猫ねこじやらしに尻しりを隠かくします。

「困こったよ、お鶴つるさん。お前まへさんにも心当こころありはないだろうか」

「ホ、ホ、ホ、銭形の親分さんがそんな事を仰しやっちゃ困るじゃありませんか。でも、今度ばかりは、本当にお気の毒ねえ」

親切とも、皮肉とも聞える言葉を空耳に、平次はお鶴に伴いてその家の前まで行っております。

「ちよいと寄っていらっしやいな？ お茶でも淹れましょう」

「有難う、少し休まして貰おうか」

断るかと思つた平次は、お鶴に誘われるまま、細かい格子戸を潜りました。

中は女やもめの住みそうな、磨き抜かれた調度、二三人の若い梳手が、男の客を物珍らしそうに、奥の方から娘らしい視線を送っている様子です。

「出廻らして御座います」

汲んで出す茶、一と口飲んで、長火鉢の猫板の上に置いた平次。

「あの娘さん達は、夜もここへ泊んなさるのかね」

「いえ、用事のない時は、日が暮れると銘々の家へ帰しますよ」

「住込みもあるんだろう」

「私はこんな性分で、人様の娘を預かることなどは、面倒臭くて出来ませんか
ら、皆んな帰って貰いますよ」

「すると夜分はお鶴さん一人だね」

「え」

「丁度いい塩梅だ。これからチヨクチヨク遊びに来るとしよう」

「あれ、冗談ばかり。そんな事を言うとは罪ですよ、これでも女なんですから」

「それはそれとして、いい加減にして、頭巾を脱ったらどうだえ」

「え？ 何を仰っしゃるんです」

お鶴は思わず屹きつとなりました。

「七人の花嫁を出して貰おうか」

九

平次の手はサツと延びて、お鶴の左の手首をピタリと掴みます。

「何をするんだえ、いやらしい。巫山戯たことをすると、岡っ引だつて勘弁しないよ」

と言うのを引寄せて、グイと掴んだ女の腕をしごくつと、二の腕に赤々と朱彫しゅぼりの折鶴おりづる。

たんちよう「丹頂のお鶴、御用だツ」

「何をツ」

どこから取出したか、お鶴の手には、キラリとあいくちヒ首、平次の首にサツと来るのを、叩き落して膝の下へ。

「お前が怪しいことは、早くから気が付いたが、証拠がなくて踏込まずにいたんだ。花嫁が七人も続けさまに消えてなくなるのに、それを手掛けた髪結いを疑わずにいるほどの平次と思うか」

言う内にも、懐ろから蛇のように引出した捕縄、見る見るお鶴の身体は高手小手に縛り上げられてしまいました。

「何をするんだ、私は女髪結のお鶴、下町でも知らない者はない。何を証拠に、銭形とも言われる者が縄を打つんだ」

畳を舐めさせられた額の赤痣は火の如く燃えて、醜女の怨の眼は、毒蛇のようにキラキラと光ります。

「黙れッ、あの壁を見ろ。ところどころに爪で引っ搔いた蛇の目の印があるだろう。あれはお静に言い付けた合図の葉、俺の名前から思い付いた銭形だ。あの印があるところにお静がいるに相違ない——サア言え、七人の花嫁をどこに

隠した」

「知らない知らない。たつて探したかったら、裏は神田川だ。水の底でも覗いて見るがいい」

不貞腐れたお鶴、齒を食い縛って、平次の顔を憎々しく見上げます。

「七人の命には替えられない。言わなきやア、平次の宗旨にはないことだが、お前の身体を五分試した。これでもか」

平次もさすがに一生懸命です、額にふり注ぐ冷汗を片手なぐりに拭き上げると、女の手から打落したヒ首を取って、その白々とした喉へピタリと当てました。

「冷たくて、飛んだいい心持だよ、さア一と思いに突いておくれ、——お前に殺されれば本望だ。何を隠そう、私は長い間、お前に岡惚していたんだよ」

それは恐らく本音でしょう。平次を斜下から見上げる悪女の眼には、不思議

な情火が、メラメラと燃えさかるのです。

「えッ、しぶとい女だ。言えッ、七人の花嫁をどこへやった」

思わずゾツとしながらも、平次はヒ首のみねを返して、女の頬を叩きます。

「駄目だよ、そんな事を言っているうちに、七匹の雌めすは一と纏まとめにして江戸から

送り出す手筈が出来ているんだ。私はお処刑しおきになるだろうが、その代り私の首

が梟さされる頃は、お静を始め七人の花嫁は、島原か長崎へ叩き売られているよ」

「何？ 一と纏まとめにして江戸から送り出す？」

平次はサツと次の間の唐紙を開けました。この騒ぎに、梳手すきての娘達はどこへ

行ったかわかりませんが、突き当りの障子を開けると、目の下は真っ黒に濁っ

た神田川の流れ、平次の胸には、始めて事件の謎を解く最後の曙光しよこうが射したの

です。

「石原の親分、そう言ったようなわけだ。面目次第もないが、当分ここへ置いておくんなさい」

ガラツ八は悄氣返しよげつて、利助の前に両手を突きます。

「――」

利助は黙つて腕を拱こまぬきました。平次の恬淡てんたんな心持が、今はもう判り過ぎるほど判りましたが、長い間反目して来た利助は、ガラツ八の前に釈然しゃくぜんとして見せるには、少しばかり負惜まけおしみが強かつたのです。

「兎も角、詫わびをするなら、石原の兄哥あにきにしろというくらいですから、あつしの言うことなどを聞く銭形の親分じゃありません。ついでの時、どうぞ宜しく取なして下さい。私はあの親分から見離されるくらいなら、頸くびでも吊つつて死んで

「しまいますよ」

道化たちにも妙に真剣なガラツ八の調子を見ると、利助は何となくくす撥ぐつたい心持になります。

「まア、いいやな、その内に何んとかなるだろう。暫くここにブラブラしているがいい」

「有難う御座います、親分」

二人がそんな話をしているところへ、表から利助の子分が二人連れで帰って来ました。

「親分、変な噂を聞き込みましたよ」

「何だ？」

「両国の水よけに、ひぢりめん緋縮緬の片袖が引掛つていたそうですよ」

「えッ」

「そればかりじゃありません。この二三日、鬱うこんいろ金色の扱しごき帯だの、鹿かの子絞こしほりの下したじめ締だの、変なものが百本杭ほんぐいや永代へ流れ着くそうですよ」

「そいつは耳寄りな話だ。行ってみるか、八兄イ」

利助は立ち上がりました。

「参めえりましたよ」

「お静さん始め七人の花嫁は、どこか河岸かしツぷちの家にでも押し込められているに違ちがげえねえ」

それから間もなく、利助とガラツ八は、子分の者に軽舸はしけを漕がせて、大川の右左を、上から下へ、下から上へと見廻り始めたことは言うまでもありません。

日はもうトツプリ暮れて、筑波つくばおろし風が、灰色の水を渡ってヒユウーと吹き起ります。

丁度その時。

銭形の平次も一艘そうの輕舸はしけを漕がせて、大川の上を漕ぎ廻っておりまして。これは、浜町河岸から駒形まで、兩岸の人家には眼もくれずに、川の中に浮んでいる船にばかり目を付けております。

七人の美女をひと一と纏まとめにして、人目に付かぬように上方へ持つて行くには、船より外に手段てだてはないと睨にらんだのでしよう。

橋の上手、この時候には滅多に見掛けない屋根船うかがのもやっているのを、遠くの方から二三度窺うかがった平次は、最早躊躇ちゆうちよはしませんでした。

見ると目ざす屋根船いかりは碇いかりをあげて、上げ潮に揺ゆるぎ出しそうな有様。

「待て待て、その船に不審がある」

宵闇の中から声を掛けた平次、輕舸はしけをピタリと付けさせると、舷ふなばたから舷へ、サツと飛び移りました。

「何だ、いきなり人の船に入つて来やがつて」

水棹みずさおを取り上げて、ガバと打ってかかるのを、身を開いて、ツ、ツ、ツ、懐ろへ入ると見るや当身一本、船頭は苦もなく水垢あかの中に仰あげ反そります。

中へ飛込もうとすると、

「誰だ、騒々しい」

胴の間から飛出したのは、一人、二人、三人、いずれも荒くれた大男。そのうちの一人は二本差しのようです。

「御用だぞ、神妙にしろ」

「何をッ」

「七人の花嫁を誘拐かどわかしたのは、貴様らだろう」

「何を、それッ、相手は一人だ、斬ってしまえッ」

三人の男は、切先を揃えて、平次を三方から取り囲かこみました。平次の武器と
いうのは十手が一挺ちよう。

真っ先に飛込んで来た脇差を引ひつ外はずして、十手を左に持換えると、右手が懐ろに入つて、取出した青銭。

「エッ」

真っ先の一人は、左の眼を打たれて引退ひきしりぞきました。

併しかし相手はまだ二人、艦ともの方からはもう二三人船頭が助太刀に飛んで来る様子です。

平次は十手と青銭とを交かわる交る飛ばして、僅わずかに身を防ぎましたが、相手の武家は思いの外の使い手で、平次も次第に圧迫されるばかりです。

大川の上から下へ、軽舸はしけを漕こがせていた利助とガラツ八は、この時漸ようやく平次の危難を見付けました。

「それッ」

と屋形船へ舳へさきを叩き付けると、利助、ガラツ八を始め、二人の子分。

「銭形の兄哥、もう大丈夫だ。利助が来たぞッ」

「親分、八五郎が参りました」

「御用ッ」

「御用ッ」

船の上には、一としきり乱闘が続きましたが、平次と利助の捕物上手な駆引と、一つは多勢の力で、大した過あやまちもなく、間もなく一味五人を、雁がんじ字がらめにしてしまいました。

中仕切を開けて見ると、胴の間には、縛られた七人の花嫁、踏ふみ碎くだかれた花束のように一と塊かたまりになって顫ふるえております。

「あッ、親分」

その中でも一番美しくて、一番気の確かなお静は、平次の姿を見ると、悪夢から覚めたように飛起きて、駆かけよ寄りしました。

七人の花嫁を誘拐かどわかした髪結のお鶴は、丹頂たんちょうのお鶴という有名な女賊で、額ひたいから眼へかけての赤痣あかあざは、人目を忍ぶために絵の具で描かかせたものでした。

併しかし痣あざはなくとも恐ろしい醜婦しゅうふうで、三十過ぎるまで男というものに眼を掛けたこともなく、もとより縁談を持込む物好きもなかつたので、自棄やけと呪のろいとが嵩こもじて、世上の美しい花嫁を皆んな手当り次第に祝言の席から攫さらって、幸福の絶頂から不幸のドン底に落してやろうと、思い立ったのでした。

それを助けたのは、悉ことごとくお鶴の相棒や子分で、美しい盛りの七人の女を、船で島原か長崎へ持って行って、いい値に売り飛ばそうとする矢先を、危うく銭形の平次に捕まってしまったのです。大川へ緋縮緬ひぢりめんの片袖や、鬱金うこんの扱帯しごぎを流したのは、お静の知恵だったことは言う迄もありません。

ガラッ八を叱り飛ばして、利助のところへやった平次の真意は、言うまでも

なく、この先輩と和解するためで、平次の蟠わたかまりのない態度に、今度こそは利助もすっかり兜かぶとを脱いでしまいました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝春秋オール讀物號」昭和七年一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行
銭形倶楽部

七人の花嫁



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>